

## 内分泌性脱毛症の 2 例

### Two cases of endocrine alopecia

島崎博美<sup>1,2)</sup>、飯田大起<sup>2)</sup>、佐々木東<sup>3)</sup>、滝口満喜<sup>3)</sup>、藤井義晴<sup>2)</sup>

Hiromi SHIMASAKI<sup>1)</sup>, Taiki IIDA<sup>2)</sup>, Noboru SASAKI<sup>3)</sup>, Mitsuyoshi TAKIGUCHI<sup>3)</sup>, Yoshiharu FUJII<sup>2)</sup>

1) 表参道ペットクリニック 2) 東京農工大学大学院農学研究院 3) 北海道大学大学院獣医学研究院

1) Omotesando Pet Clinic 2) Tokyo University of Agriculture and Technology 3) Hokkaido University

#### [要約]

炎症脱毛の原因として内分泌疾患や遺伝性による毛周期の異常、毛包やメラニンの産生に由来する毛構造的異常、自己誘発性、特発性が考えられる<sup>1)</sup>。下垂体性副腎皮質機能亢進症 (PDH) による脱毛は、犬では最も一般的な内分泌性脱毛の 1 つであり、グルココルチコイド過剰による毛根休止が原因とされる<sup>2)</sup>。今回、難治性脱毛を呈した副腎皮質機能亢進症の 2 例にポリフェノールコンプレックスおよび植物由来生理活性物質による治療を試み、良好な発毛を見たので、その概要を報告する。

#### [症例 1]

M. ダックス、避妊雌、13 歳、体重 5.3kg。PDH を 2 年前に発症。ステロイドの投薬歴は不明。腹背部、鼠径部を中心とする皮膚の菲薄化、潰瘍、多飲多尿、腹部膨満、頻回起床、徘徊、遺尿があった。ALP の上昇、高インスリン血症がみられた。T4、TSH は基準値内だった。エコー検査では両側に腫大した副腎が描出された。2 回行った ACTH 刺激試験の刺激後血中コルチゾール ( $\mu\text{g}/\text{dl}$ ) はそれぞれ 27.7、36.7 だった。650 病日より L-DOPA 含有のハーブコンプレックスの菊芋由来ハーブコンプレックス 5g/day、Mucuna pruriens 主体のハーブコンプレックス 0.19/kg/day <いずれもアルデバラン (株)、札幌> を処方したところ、705 病日で皮膚の菲薄化、潰瘍、脱毛が改善した。多飲多尿、腹部膨満の症状は現状維持であった。現在投与開始から 388 日経過。副作用は認められず、経過観察中である。

#### [症例 2]

ウェスティ、去勢雄、14 歳、体重 7.3kg。脂漏症を伴う掻痒、不眠、沈鬱、さく瘦、を主訴に当院に転院。頸胸腹側部、両後肢、尾部を中心に脱毛、腹部から四肢末端にかけて色素沈着、潰瘍部皮膚の肥厚、リンパ節の腫脹、沈鬱、過食、呼吸促迫を呈していた。左側心尖部収縮期雑音 (Levine III / VI)、毛包虫+、軽度の非再生性貧血、TP、ALP、電解質の異常が認められた。T4、PTH は基準値内であった。北海道大学附属医療センターにて、CT およびエコー検査にて両副腎の腫大および結節が認められた。内因性 ACTH28.8pg/ml (正常 5 ~ 36pg/ml)、尿中ノルメタネフリン・クレアチニン比:261.2 (褐色細胞腫 > 467) であった。これらの結果から PDH と診断した。8 病日よりベナゼプリル 0.34mg/kg SID を処方、15 病日よりドラメクチン 0.6mg/kg を 1 週間毎に皮下注射、血府逐瘀丸 (イスクラ産業 (株)、東京) 4Tab/day を処方した。70 病日より Mucuna pruriens ハーブコンプレックス 0.19g/kg/day <アルデバラン (株)、札幌> を処方した。133 病日より沈鬱、色素沈着、皮膚の潰瘍の改善がみられた。多食、腹部膨満は現状維持であった。151 病日には電解質バランスも改善した。

#### [まとめ]

PDH に伴う皮膚潰瘍・炎症性脱毛は頻発症状の一つであり、苦痛と不快を伴う。2 例とも初診時は皮膚の潰瘍性出血が顕著で、症例 2 は毛包虫症を併発していた。毛包虫症の治療を 9 週継続後も皮膚潰瘍、脱毛症状は継続していたが、Mucuna pruriens

主体のハーブコンプレックス投与後は改善した。豆科植物中には、多くの生理活性物質の含有が認められており、成分の一つとしてL-dopaが含まれている。しかし、豆の栽培条件、加工技術等で、含まれるL-dopa量は変化する<sup>3)</sup>。今後、犬の脳内ホルモンが全身に及ぼす影響を調べるとともに、植物の生理活性物質が生体内に及ぼす影響、L-dopa以外の含まれる成分について研究を継続したい。

#### 参考文献

- 1) 長谷川篤彦監修, 徴候からみる鑑別診断 犬と猫の臨床, 学窓社, 2010.
- 2) 長谷川篤彦, 辻本 元監訳, SMALL ANIMAL INTERNATIONAL MEDICINE 第4版, 766-768, interzoo, 2011.
- 3) 藤井義晴. アレロパシー検定法の確立とムクナに含まれる作用物質 L-DOPA の機能. 農業環境技術研究所報告, 1994, 10: 115-218.